幼稚園の教師に望むもの

教師の創造性と幼児の創造性（二）

飯田泰造

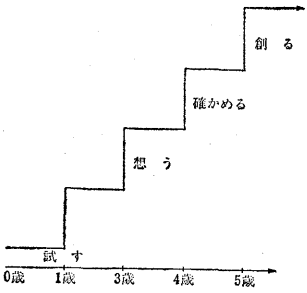
子どもの創ることを表現として見るなら、自分から積極的、意志的にする活動を示しているものであろうから、その姿がはっきりしてくるのは五歳以後のこととなるであろう。

それは為すわざであると同時に成ってくるものと考えられる。為すわざとは自らを作ろうとする力であって、それのみが強いとその子どもの内的な活動ではなくなり、真実を離れてしまう。それは本来のものでなくいや味である。為すわざは造形性とか思考力とかくふうする力であって、もちろんこれもこの年齢段階では必要なことであるが、同時にこれは為すことによって成ってくるという、その子ども本然の姿がそこに現われてくるものでなければならない。

この二つの働きが調和されたとき、子どものよい表現が見られ、よさや美しさもそこに見られるのではなかろうか。

成るとは子どものイマジネーションであるといえる。為すことをおし進めるには教師は素材を用意してやったり、表現の方法を刺激したり、また、ある場合には教えることも含まれてくるであろう。しかし成るわざは教えることはできない。個々のものであってこれは育てておかねばならぬことである。

このような創る活動に至るまでには、いくつかの発達の段階を経てくるものであって、表現にはこの前段階がきわめて大切に考えられねばならない。それが創造的になされてきたかどうかが大きく作用すると共に、幼稚園や家庭においてその後もなおその不足を経験の中で充足していかねばならないと考えられる。これは少しく説明を要することであるので図式的にまとめて考えてみよう——。



☆「試す」ことの大切さ

生後数ヶ月の赤子が手を振りまわしたり、何でも口に持っていったり、やぶったり、割ったりしてみるしぐさは、一見何ら無意味な動作のように考えられるけれど、その中にはたいへん重要な意義があるといわれる。無意識的に外界を自分のものにしていく（マスターする）ことであるからだ。

（成人でもそのものによって表現するに際しては十分にその素材を自分のものとしてかかることが必要であるように）後々幼児が表現を自由にするにはこの前段階がとても大切であると考えねばならない。

それはいじくることであり、試す段階である。造形的な活動について考えてみるならば、赤子は運動感覚的なこのようなしぐさをしているうちに、クレオンとかチョークとか描けるものをもてあそんでいると、そこに描けてたことを見出して喜ぶであろう。文字通りこれは錯画であり、なぐりがきであって意味のないものではあるが、こうして試していることが次の段階への準備となる。

ことばでいうならば、これまでは泣くとか笑うとかであろうが、次第に親や四囲の者のいうことばを真似て、おうむ返しに事物や動作などとを結びつけていく。こうしてものを知っていくのであろう。

三歳児はずいぶんと外界を知り得て、不確かながら概念もふえてくる。それはことばでいえるということで表わされる。

そのとき、幼児は錯画的に描けた空間の中に、自分の知っているものを見つけ出すであろう。これはとても大きな発見であり、進歩である。すなわち一つのものから他のものを想う、連想の働きであって心の中に新しいものをつくり出していることであり、想像である。

これは創造性の胚芽であろう。

ことばでも次第に自分の気持がその中に含まれるような表現の仕方をするようになってくる。

☆「想う」ことをはげまそう

〃二歳八ヶ月の女の児は柱の節穴を見ては「ニャーニャー」といった〃

〃三歳の男児が夜空を見上げて「オホシサマがピカッテルヨ」

といった。ピカピカ光っているということの気持をいっている〃

〃テレビを見ていた三歳半の男の児が「オニイチャントオネエチャンガウレシコンデルヨ」　嬉しそうに喜んでいる意をいっている〃

この年齢の子どもはもう親や四囲の真似をするだけに止まらないで、それをのり越えてつくり出していく働きも見られてくる。

三歳という年齢は誠に想像力の旺盛な、また伸びる時期と考えられるので、あらゆるでだてによってそれを伸ばし、はげますことが大切である。

母親が豊かな夢をもってお話を語り聞かせてやったり、美しい歌を歌ってやり、音楽を楽しむことも大切であろう。また、今ではすばらしい幼児向きの絵本も出版されているのだから、ぜひとも豊富に正しく与えてやりたいものである。

子どもの絵を描く活動は、まだ錯画であるのだから、まだまだ形をせっかちに要求するのでなしに、そこからいろいろなイメージを引き出すことを重要視していくべきである。絵だけでなく、積木や、想像的な玩具や遊具も子どものイマジネーションを豊かにしていく創造的な環境づくりの大切な役目を果たす。

ただ、いつでも人為的なものだけでなく、自然のなまのものを取り入れることを忘れぬようにしたい。うっかりすると雲一つよく見ることのできない都会の生活の中にも、見出しうる自然はあるもの、子どもと一緒になってそれを見つけ出し、感動しよう。

「おもしろいな、美しいな！」と喜んだり、驚いたりすることが大切である。そして子ども自身の発見を大切にし、とり上げてやろう。この年齢の子どもの発見などはまことにたあいないものであったり、下らないものであってもそれをよく発見したなと認めてやり、はげましてやることが大切である。

〃四歳の男児が母親と戸口に立っていると、ごみ屋が清掃に来て自分の家のごみをきれいにして行った。その後姿を見ていた男の児が「アノオジチャン、キップクレッテドウシテイワナイノ？」と不思議そうに尋ねたのである。母親はしばらくしてからそれがバキュームカーの清掃との比較であるのに気がついた〃

子どもの発見を認め、はげますということは、そのときすかさず与えねばならぬものであって後からでは効は薄い。

このように「想う」ことをはげまされ、経験してきた子どもは、もはや漠然と知っているだけの概念でなく、確かなものにしようとしはじめる。

☆「確かめる」ときに広い経験を

三歳の後にくる反抗期は「どうして？」「なぜ？」という質問期でもあるように口うるさく問い質す。そうしてことばも豊富になっていくが、いろいろ遊びの中や、絵を描くことでもそれをやっている。

この年齢の子どもの絵はカタログ的表現といわれるように、一枚の紙の中にばらまくように、自分の知っているものをなんべんとなく描いてはためし、描いては失敗して描く。上下左右の空間関係など無視して描いても、その一つ一つが自分にとっては対象支配なのだから意に介しないで繰り返し描いている。描くことによって概念を確かめているのであるから、たくさん描かせて確かめさせたいわけである。

当然このような段階であるから、子どもの日常生活の中で豊富な経験がなされていることが大切であるし、その経験を土台にしていろいろなものを描いていくであろう。

経験をするとか、認識を深めるとか、いろいろなものをじっくり見つめることをおしすすめてやることも、ここでは創造性育成の要件と考えられる。「確かめる」段階である。

このようにして再三再四描いたり、質問したり、試行錯誤をしたあげく、自分なりの概念ができあがると、一応自身をもって今度は表現を自らはじめる。

五歳児はもはや四歳児のような自然発生的な（成ってくる）ばかりの表現ではなくなり、ここまでかかって作られてきたその子の様式を駆使しはじめる。もしも様式によって絵を描くことが単に判をおしたようなものに止まったなら、つまらない表現になり下がってしまうのだが、ここでこれまでに創造的に——ということはそれぞれの発達の段階を、その意義に沿って十分に経験してきた子どもは、その様式を変形して駆使するのである。

為すわざの中に豊富なイマジネーションを働かせてその子どもの心が成ってくるのである。感動や情緒性によってその様式が著しく自由に変形されてしまっていることによってその子どもが語っているのである。

それはその子どもの生活がそこに土台としてあり、経験が躍動し、物語っている。物語らせねばならないともいえよう。このような表現は、すばらしく、子どもらしく、真実でまたそこによさや美しさを含んでいるであろう。それは絵に描くことによって物語ると同時に、ことばでもいっているのだからそれを聞いてやることもはげみとなる。

ことばはこの年齢に急速な伸展をみ、早い子は文字を読み、書き、簡単な文章をつづる。そして入学という順序であろう。

このことから考えて、創造性の豊かな子どもとは、それぞれの段階において、「試す」ときには十分に試し、「想う」ときには想うことを十分にし、「確かめる」段階では十分に確かめる経験をし

てきたということではないだろうか。そしてやがて「創る」創造の段階では自分のそれまでに積み重ねたものの上に、思考力を働らかせ、くふうを加え、表現（造形）する力を得て、よい表現をするであろう。

子どもの創造性を考えるとき、イマジネーションという感覚的な力が大切だが、芸術的な創造だけでなく、このように考え出したり、くふしたりする知的なものも含めて考えなければ片手落ちであろう。

これらは一つに総合された活動となる。そのどちらをはげますことも創造性の育成には大切であるが、全体的、総合的になされねばならぬことである。

「製作」活動などは表現にあたってずいぶん思考力やくふう力が要求され、技術も加わってくるがそこで望まれるものは決して感覚的、芸術的なものを捨ててしまうのではなく、その子どもの想像力や自身の感情が深く関わっていてこそほんとうのものとなるであろう。

（この意味で幼児には理科工作とか実用工作というようなものはない）

☆幼稚園を見まわしてみよう！

子どもが、自分の体験からやったとしても、自ら新しい経験にたち向かっていく姿には創造の姿が見られる。それは何かをやろうとし、積極的で、輝きのある態度である。

遊びをつくり出す、何かを形づくる、自分の気持をことばで伝える、音楽的に表現する、体をリズミカルに動かす、等々もその子どもの表現であれば、そのような中に創造の姿が見られる。

さて私たちはそのような動きや伝えかけをはげまし伸ばすように環境を整えてやっているだろうか。雰囲気をそのようにかもし出させているであろうか。そんな面から見まわしてみると、……ブランコ一つにしても合理的で堅牢な（教師にあまりやっかいをかけない）今様のものは、そのような子どもの心の動きの振幅を縮めてしまうものがありはしないだろうか。

子どもたちは、あるときはその一本をはずし、自然木の枝に掛けて空想の翼を広げようとしてもそうはいかない。滑り台を滑るにしても、約束にしばられて子ども本来の想像豊かな遊びを制約されてしまうことがありはしないだろうか。子どもは一本の綱を見つけてきてしばりつけ、ターザンになり、ロッククライミングを試みる。（危険はあくまで周到にさけねばならないが）あまりに神経質になるとそれをおしつぶしてしまう。ひ弱さやきれいごとが幼稚園という体質の中にありはしないかとささやかれたりもする。

それは創造性の育成にとってブレーキとなるのではないだろう

か。遊具や庭の環境についてももう一度見まわしてみよう。

それは保育室についてもであって、家具や道具の置き方、場所についても創造的な心ぐみをもってみよう。これは教師としての努力点であろう。

そして日常生活の中で「なぜ？」「どうして？」と質問の出てくるような素材を用意してやることは、くふうしたり考える力の根っことなり、科学する心の芽を育てることなのだから大切にしよう。それは決して理科教育や知識のつめ込みをしようというのでなく、それらの土台づくりであり、創造性という人格形成のわざなのだと考えたい。

これは今のことなのだが、前の段階がとても大切だと考えてきた。もしそれが不十分と考えられるならば補足してやらねばならない。試すこと、想うこと、確かめること……。（それは不十分なことの方が多いと考えられる）それが泥んこ遊びや粘土遊び、フィンガーペインティングやちぎり紙の活動であると考えたい。自由な音楽的表現を考えたり、想像を豊かに誘う絵本の適切な与え方を考えてやることもある。

先生のする親味なおはなし（童話）ももちろんであり、肌と肌のふれあいの生活の中に子どもの創造性は地味に徐々に育っていくものではなかろうか。

（上ノ原幼稚園）

日本保育学会 第21回大会

会　期　昭和四十三年五月十八日（土）
　　五月十九日（日）

会　場　宮城学院女子大学
　　仙台市東三番丁一六六

内　容　(イ) 研究発表
　　(ロ) シンポジウム
　　(ハ) その他

連絡先　仙台市東三番丁一六六
　　宮城学院女子大学内
　　日本保育学会第21回大会準備委員会
　　TEL—〇二二二の二一の六二一一